

## 現代短歌の中の地球科学

### ～堆積岩・鉱物編～

今回は堆積岩と鉱物を取り上げます。堆積岩は火成岩と違って地味な存在なのでしょう。あまり、注目されていないようです。また、意外なことに宝石の短歌というのも多くありません。もののイメージに引きずられ過ぎるのは詩としてやりにくいのだと思います。

危くも砂岩にのこす文字の線けい勁く  
さやけきものも減びむ 窪田章一郎

砂岩は岩片や鉱物粒子などの砂粒が粘土物質、炭酸カルシウム、珪酸などで固められてできた岩石を指します。基本的には、組織と組成によって分類されます。この短歌に出てくる砂岩は何でしょうか。文字が掘ってあるとすると碑か墓かもしれません。最近の墓は花崗岩がポピュラーですが、古いものや、一般人のものだとしたら地元の石を使ったかも知れません。

どこの石か思い出されず座り悪き  
茶色の石が本棚にある 永田和宏「華氏」

実は、この歌の作者がどういう石を持っていたのかは不明です。短歌を読んであれこれ想像してみるに、チャートかなあ...と私が思ったに過ぎません。たぶん、川原で拾ったものでしょう。チャートは放散虫の遺骸と粘土などが深海底にたまって堆積岩となったもので、その縞模様は放散虫の遺骸の貯まり方のちがいによってでき、混じている物の種類によって微妙に色が違います。灰色が多い川原の石の中で、茶色できれいな縞模様が入ったチャートなら、拾って帰りたくなるでしょうから。

石英のきはだちて光る角度あり岩の露頭を  
めぐりて行けば 大西民子「風の曼陀羅」

石英がきわだって光る岩の露頭って何の露頭なのかな...と考えました。やはり花崗岩の露頭でしょうか？歌集の中では、短歌は独立した作品、または一連の作品として表されています。作者は表現したいことを凝縮してぼんと読者の前に投げ出します。読者には作品を讀

んで自分の中であれこれ想像する楽しさがあるのです。山道や田舎道で、岩の露頭に通りかかったとき岩がきらりと光った...きっと石英が光っているのだ、と作者にはひらめいたのでしょうか。たぶんこのような場所はたくさんあると思いますが、露頭をみたとき、あの歌の露頭もこんな感じかな、と思えばそれは楽しいものです。

オパールは涙の石と知らずしていつの日よりか  
その石を持つ 武市房子「塔のある景」

オパールは、化学式： $\text{SiO}_2 \cdot n\text{H}_2\text{O}$ の非晶質またはそれに近い含水珪酸鉱物で、直径20nm (1nm=10<sup>-9</sup>m)程度で球体が最密充填で積み重なり、球と球とのすきまで光が反射干渉して遊色(虹色)が生まれます。熱水からの沈殿物で熱水変質した火山岩を交代したり、その空隙を満たしたりしますので金属鉱脈の脈石などとして産出します。そのうち遊色の美しいものは宝石として珍重されます。メキシコ・オパールは火山岩の脈中に熱水から沈殿したもので透明感のある赤色が多く、オーストラリア・オパールは堆積岩中に地下水から沈殿したもので緑や紫色が多いようです。19世紀から知られているオパールはスロバキア産の火山起源のもののように。

作者が持っているのはどっちでしょうか。涙の石というイメージでは青いオーストラリア・オパールかもしれませんが物語になぞらえているところを見ると古くから知られた赤いオパールかも知れません。

雲母<sup>きらら</sup>ひかる大学病院の門を出でて<sup>かたみ</sup>癪の我の  
何処へ行けとか 明石海人「白描」

雲母は多くの火成岩、変成岩、堆積岩に含まれる造岩鉱物です。化学組成の違いによって黒雲母、白雲母、金雲母、などの種類がありますが、この短歌の場合は、門柱が光るので、きっと花崗岩に含まれている黒雲母ではないか...と思います。作者は、昭和2年、ハンセン病にかかりました。当時のこの病気に対する偏見を思うと作者の絶望感が同えます。

作者紹介  
窪田章一郎：明治41年東京都生まれ。平成13年没。  
永田和宏：昭和22年滋賀県生まれ。  
大西民子：大正13年宮城県生まれ。平成6年没。  
武市房子：昭和11年東京都生まれ。  
明石海人：生年不詳。昭和14年没。

森尻理恵(産総研 地球科学情報研究部門 地球物理情報研究グループ)